研究発表

刊記を疑う
－ 校合調査に基づく刊年・印行年の推定 －

和漢古典籍研究分科会

駒澤大学図書館　松下　賢
成城大学図書館　高島　みなみ
中央大学図書館　八木　彩香
鶴見大学図書館　堀　はな恵
立正大学図書館　小此木　敏明
早稲田大学図書館　藤　順一

１．はじめに

和漢古典籍資料の目録作成において、出版年不明としてしまっている資料についてどのようにしたら刊年や印行年を推定できるのか、刊記の記載年をそのまま刊年として記録しても良いのか、という課題が存在する。今回これらの課題を解決する一つの方法として「校合」を選択し、研究テーマを「刊記を疑う- 校合調査に基づく刊年･印行年の推定 -」とし、会員所属校の古典籍資料を用いて校合調査を実施した。なお、校合は「他の書物の本文と較べ合わせて、何れがより正しい本文であるかを考究しようとすること」（『日本書誌学用語辞典』）と定義されているが、本研究では、本文を比べ合わせることは必ずしも含まず、広い意味で複数資料を比較・検討する、という意味で校合という言葉を使うこととする。

２．刊年・印行年の判断方法について

校合調査の事例を紹介する前に、刊年・印行年をどのように取り扱うのか、NII や NCR、研究者の意見を確認したい。

まず NII コーディングマニュアル（和漢古書に関する抜粋集）や NCR をまとめると以下のようになる。

・出版年（PUBDT）は刊記の記載があれば刊記から、記録する。
・刊記がなく、序文・跋文その他情報源から得られる場合は、情報源を示す語を付加する。
・出版年が推定できない場合には「［出版年不明］」と補記する。

NII や NCR の方針は原則一致しているが、その内容は記述方法が示されているだけで、刊年・印行年の判断は目録担当者に委ねられていると解釈できる。通常の目録作業であれば、この運用に則って目録を作成すれば問題はない。しかし、古典籍資料の刊印という性質上、安易に目録を作成してしまうと正確な目録とならない可能性がある。

続いて、長澤規矩也・堀川貴司・中野三敏・大沼晴暉氏ら研究者の論稿等を確認したが、刊年・印行年をしっかりと判断し、それぞれで記述することが理想であるとしながらも、明確な判断方法は示されていない。

刊年・印行年を判断するには、資料への精密かつ正確な調査が必要であり、他伝本との校合も一つの方法だということが確認された。

３．事例①『科註妙法蓮華経』

ではここから、実際に校合を実施した事例を見ていきたい。まずは『科註妙法蓮華経』（以下『科

註』）という仏教経典で、10 種類の版本を確認した（表 1）。それぞれ刊記部分には寛永 8 年～元禄 4 年までの記載があり、そのうち 8 種類には「刋」「新刋」「開板」「板行」など、記載年に版木を作成して刊行したと受け取れる内容を確認することができた。はたして、これらの記載を信じて目録を作成しても問題ないだろうか。元禄 4 年の資料には「埋木」という処理が施された痕跡も確認された。

まずは刊記丁において校合を実施した（図 1）。それぞれ見ていくと、寛永 8 年と慶安 2 年では「陀」字の画数が異なり、慶安 2 年と 4 年では「辶」の角度、寛文 8 年は字様が明らかに他と異なる、寛文 11 年は訓点の「ノ」字が特徴的で、貞享 3 年では「賢」字の横画が大きく突き出ている。これらの箇所を比較していった結果、刊記丁だけで考えれば、慶安 4 年と天和 3 年、寛文 11 年と延宝 4 年、貞享 3 年と元禄 4 年がそれぞれ同版資料であり、刊印の関係のように思われる。

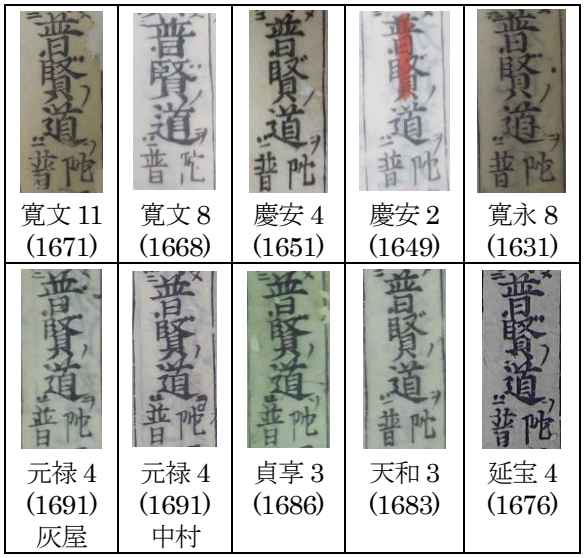


図 1：『科註妙法蓮華経』刊記丁校合写真

当然ながら、刊記丁だけですべてを判断できないため、他の巻・丁についても校合を行なった。すべての丁を確認することは煩雑となるため、版心部分や黒口、魚尾、辺、界線など一見して特徴が認められる丁を探していった。こうすることで、校合調査の精度が上がっていく。

校合において判断した刊印の関係を表 2 にまとめた。刊記丁の校合結果と一部異なる結果となったので、ここで指摘しておく。まず、慶安 4 年資料は刊記丁だけの判断であれば、寛永 8 年と異なる版と考えられた。しかし、全体を校合していった結果、多くの点で寛永 8 年と同版である可能性が認められたため、慶安 4 年を寛永 8 年の後印本と位置づけた。なお、天和 3 年は刊記丁で慶安 4 年の後印本と考えられたため、こちらも寛永 8 年と同版の後印本とした。この 3 つの資料は刊記記載年が異なるが、出版者が同一のため齟齬は生じないと考えている。

続いて、元禄 4 年の灰屋三良右衛門資料を欄外に示した。この資料は刊記丁において貞享 3 年の後印本と考えたが、全体を校合した結果、貞享 3 年と寛文 11 年の版木が一緒に使用されていることが分かった。灰屋資料のうち、約 7 割が寛文 11 年の版木、約 3 割が貞享 3 年の版木を使用していたが、いわゆる取り合わせ本というものではなく、1 冊の中にそれぞれの版木が交じっている状態である。同じ元禄 4 年の中村五兵衛資料と灰屋資料でなぜこのような相違が出たのか、その関係をはっきりとさせるには、更なる調査が必要となる。

校合の結果で目録を作成すると、それまで刊年のみを記載していたものが、後印本として印行年まで記載できることとなった。また、当初独立した版であると思われた慶安 4 年資料も後印本として印行年を推定できた。

この結果をもととして、端本資料の刊年・印行年を推定することが可能である。例えば、寛文 8 年資料などは、その字様の特徴から簡単に推定することができる。

『科註』の事例では、刊記に版木の作成を示す「開板」などの記載があっても、刊記の年号が刊行年と一致しない場合があることが確認できた。刊記の記載を鵜呑みにしてしまうのではなく、疑ってみるということも必要である。

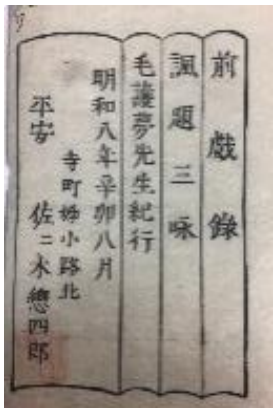
４．事例②『勢多唐巴詩』

事例の２つ目は、『勢多唐巴詩』（以下『勢多』）という狂詩集である。17 点確認したところ、すべて明和８年の序があり、日本古典籍総合目録データベースはその年を成立年として記録している。確認した資料の字形などを比較すると、すべて同版資料であることがわかる。しかし、匡郭の割れ等、摺りの状態の違いから考えると、印行年はそれぞれ別の時期であると推定できる。そのため出版年をすべて「明和８ 序」と一括りにすることには抵抗感が生じる。

そこで各資料の印行年を探るために、刊記や広告等の有無によって、次の３グループに分類し、校合を実施した（図２）。

Ⅰ「出版年・出版者名・広告がある資料」
資料記号：S2・S3・S4

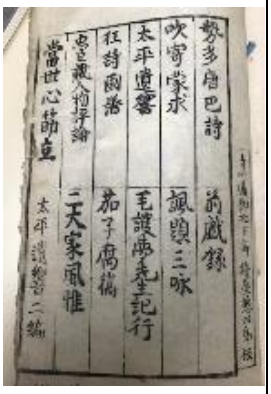
S2



S4

Ⅱ「出版者名・広告がある資料」
資料記号：S5・S6・C1

S5



C1

Ⅲ「出版者名・広告がない資料」
資料記号：S1・S7・S8・S9・S10・K1・W1・W2・W3・W4・W5

S9

W2

※資料記号については表３を参照、写真は一部

図２：『勢多唐巴詩』の分類

まずⅠグループの S2 と S4 を見ると、それぞれ刊記として「明和８年」の記載がみられる。特に S4 は資料全体を通しても摺りの状態も良く（表３）、広告に掲載されている書名の刊行年も明和８年以前（『前戯錄』明和７刊、『諷題三咏』明和８序・跋、『毛護夢先生紀行』明和８刊）であることから、S4 は印行年ではなく、明和 8 年を刊年と推定した。一方、S2 は S4 と同一の刊記をもっているが、匡郭の一部や広告の書名（『諷題三咏』）の３文字目が欠けているなど、摺りの状態が悪いため S4 の後印本と推定できる。ただし、これだけでは印行年の推定の材料としては不足しているので、別グループでの校合結果とも合わせてみていきたい。

次にⅡグループの S5 を見ていくと、S4 よりも摺りの状態は悪く、また S4 の広告の書名に加え、明和（『茄子腐稿』明和７刊、『狂詩画譜』明和８刊）・安永（『吹寄蒙求』安永２刊、『太平遺響』安永７刊）・天明（『忠臣蔵人物評論』天明元刊、『花盛金のなる木』天明３刊）年間に刊行された書名が加えられていることから、天明頃の後印本と推定した。C1 は S5 よりも匡郭の割れが増えていること、広告も寛政（『二大家風雅』寛政２、『當世心筋立』寛政２、『太平遺響二編』寛政 11 序）年間

の書物が掲載されていることから、寛政頃の後印本と推定した。

そして、Ⅲグループの S9 は裏見返しに「癸未年」をもつ書入れが確認できた。『勢多』成立年である明和８年以降の「癸未」は文政６年であるので、その頃までには摺られたものと推測した。また、寛政頃と推定した C1 よりも匡郭の割れなどが増えていることから、書入れと合わせて文化から文政頃の後印本と推定した。W2 は書入れもないが、摺りの状態は S9 と同様であり、こちらも文化から文政頃の後印本と考えられる。

Ⅰグループの S2 の摺りの状態を再度確認する。S2 は、S9・W2 よりもさらに界線の割れが増えていることから、文政頃よりも後に摺られたものと考え、S2 の印行年を江戸末以降と推定した。

校合の結果、S4 に記載された明和８年を刊年とみなし、その他の資料については後印本として、印行年を推定することができた(表 4)。『勢多』では同版資料でも摺りの状態や、広告・書入れの比較から印行年を推定できる可能性があることが分かった。無刊記資料である S9 や W2 は序文の記載年を頼りに「明和８序」と記録してしまう。また S2 は刊記を持っているために特に調査を行なわなければ、「明和 8[刊]」となってしまう。しかしそれでは正確な目録とならない可能性がある以上、安易に記載年を記録しないことも必要である。

５．おわりに

2 つの事例を踏まえて本報告をまとめておきたい。古典籍資料は版木が彫られた年代を刊年、摺られた年代を印行年とする。刊行された後に、その版木が時代を経て彫りかえられずに摺られることや、刊記部分や誤った個所など一部分を彫りかえて摺られることもある。刊年・印行年を判断することは研究者からも指摘されている通り、資料の精密かつ正確な調査が重要である。資料単独で判断するよりも、複数資料を比較することで、より正確な、充実した目録を作成できる可能性があり、校合はその一つの方法である。

校合調査はその特性上、調査時間を要するものの、その結果「刊印」の判断、それぞれの年代を特定あるいは推定できる方法として有用であるということは、2 つの事例から考えても明らかである。刊記の記載年、序文・跋文に記載されている年号を安易に目録へ記録してしまうのではなく、時には刊記の記載を疑うことも必要であろう。また、端本資料を含む無刊記資料を、校合調査の結果に当てはめることで、出版年不明とはせずに、年代を推定し補記することが可能となる。

自館に他伝本がなく校合できない場合であっても、図書館の繋がりを活かし他館とも協力することによって校合が可能となり、結果として出版年不明資料を減らすことにつながる。校合という作業を通して古典籍資料と深く向き合うことで、利用者へ正確な目録が提供できるのであれば、図書館員として取り組むべき調査ではないだろうか。

発表後のアンケートにて、研究テーマを明確にし、その解決策や新たな視点を示す「研究発表」をすべき、という感想があった。しかし、「はじめに」でも述べたように、本発表の課題は明確で、その解決策として選んだのが校合という方法である。もちろん、刊印を推定するためには校合以外の方法もあり、校合によってすべてが判明するわけではない。しかし、会員所属校の古典籍資料という限られた範囲の調査であっても、精密な観察と的確な判断によって、刊記そのものを疑うことも、刊か印かを区別することも可能だということを示し得ただろう。

参考文献

市古夏生編 2014『元禄・正徳板元別出版書総覧』勉誠出版
井上隆明 1998『近世書林板元總覧』青裳堂書店
井上宗雄ほか編著 1999『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店
大沼晴暉 2012『図書大概』汲古書院

岡雅彦ほか 2011『江戸時代初期出版年表』勉誠出版
川瀬一馬 1982『日本書誌学用語辞典』雄松堂書店
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編 2010『図説書誌学』勉誠出版
鈴木俊幸編 2007『近世書籍研究文献目録』ぺりかん社
長澤規矩也編著 1979『図書学辞典』三省堂
長澤規矩也 1983『長澤規矩也著作集』第 4 巻 汲古書院
中野三敏 2015『江戸の板本』岩波書店
廣庭基介，長友千代治 1998『日本書誌学を学ぶ人のために』世界思想社
堀川貴司 2010『書誌学入門』勉誠出版
和漢古典籍研究分科会 HP
http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/kotenseki/

図表出典
図 1・2 所蔵館資料を撮影
表 1～4 筆者作成

版本	所蔵	刊記記載文	校合前出版年	校合後出版年
寛永 8 年	【立正】A12/159	寛永辛未仲春吉旦／書林豊雪斎道伴**刊**	寛永 8 [1631] 刊	寛永 8 [1631] 刊
慶安 2 年	【駒澤】H353/51	慶安貳巳丑年林鐘／書林豊興堂**新刊**	慶安 2 [1649] 刊	慶安 2 [1649] 刊
慶安 4 年	【立正】A12/591	慶安四辛卯夷則吉旦　中野氏道伴	慶安 4 [1651]	[寛永 8 (1631) 刊] 慶安 4 [1651] [印]
寛文 8 年	【駒澤】H35383	寛文八年戊申臘月吉旦書肆**重刊**	寛文 8 [1668] 刊	寛文 8 [1668] 刊
寛文 11 年	【立正】A12/156	寛文拾一暦辛亥二月吉辰／京寺町二条上ル町山田屋喜兵衛**開板**	寛文 11 [1671] 刊	寛文 11 [1671] 刊
延宝 4 年	【立正】A12/157	延寶第四丙辰点孟秋上浣／寺町通二條下ル町／中村五兵衛**開板**	延宝 4 [1676] 刊	[寛文 11 (1671) 刊] 延宝 4 [1676] [印]
天和 3 年	【立正】SA12/17/2-10	天和三癸亥仲冬吉旦　中野氏**板行**	天和 3 [1683] 刊	[寛永 8 (1631) 刊] 天和 3 [1683] [印]
貞享 3 年	【立正】A12/564	貞享第三丙寅天仲春上浣／摂陽心齋橋筋順慶町角／励学堂　河内屋善兵衛**刊**	貞享 3 [1686] 刊	貞享 3 [1686] 刊
元禄 4 年	【駒澤】H353/87	元禄三辛未年文月下絃／寺町通二條下ル町／中村五兵衛／**開板**	元禄 4 [1691] 刊	[貞享 3 (1686) 刊] 元禄 4 [1691] [印]
元禄 4 年	【立正】183.3/Ka12	元禄三辛未年文月下絃／大坂平野町梅檀木／灰屋三良右衛門	元禄 4 [1691]	※継続調査

表 1：『科註妙法蓮華経』リスト

刊	印	
○寛永 8 年(1631)［京］、豊雪斎道伴	慶安 4 年(1651)［京］、中野氏道伴	天和 3 年(1683) 同
○慶安 2 年(1649)［京］、豊興堂 （＝中野小左衛門）	／	／
○寛文 8 年(1668)　＊書肆名なし	／	／
○寛文 11 年(1671)　京、山田屋喜兵衛	延宝 4 年(1676)　京、中村五兵衛	／
○貞享 3 年(1686)　大坂、河内屋善兵衛	元禄 4 年(1691)　京、中村五兵衛	／
	元禄 4 年(1691)　※寛文版と貞享版が交じる 大坂、灰屋三良右衛門	

表 2：『科註妙法蓮華経』刊印リスト

チェックポイント		S4	S5	S6	C1	S7	S9	S10	K1	W1	W2	S1	S2	S3	S8	W3	W4	W5
①	序（義鵬子）2 丁表 匡郭右下割れ	×	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○
②	本文 4 丁表 匡郭上部割れ	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	本文 6 丁表 「安陀羅校」の＜校＞はらい	長	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短
④	序（義鵬子）1 丁表 匡郭右割れ	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	序（梅村和中散人）尾裏 匡郭左部割れ	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥	序（義鵬子）4 丁裏 2 行目下「補」の送り字＜寸＞の点	○	○	○	○	×	×	×	×	-	×	△	×	×	×	×	×	×
⑦	本文 6 丁裏 匡郭左側に割れ	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧	本文 8 丁表 3 行目「枚」の＜ノ＞	長	長	長	長	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短
⑨	本文 8 丁裏 界割れ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○

◇資料記号について　S：成城大学図書館　K：駒澤大学図書館　C：中央大学図書館　W：早稲田大学図書館
◇○：有/該当　△：やや有　×：なし/該当せず　　◇短：短い　長：長い
【印行時期の推定】S4 → S5 → S6・C1 → S7・S9・S10・K1・W1・W2 → S1・S2・S3・S8・W3・W4・W5

表 3：『勢多唐巴詩』校合リスト

資料	校合前出版年	校合後出版年
S4	明和 8 [1771] [刊]	明和 8 [1771] [刊]
S5	明和 8 [1771] 序	[天明頃] [印]
C1	明和 8 [1771] 序	[寛政頃] [印]
S9	明和 8 [1771] 序	[文化～文政頃] [印]
W2	明和 8 [1771] 序	[文化～文政頃] [印]
S2	明和 8 [1771] 序	[江戸末以降] [印]

表 4：『勢多唐巴詩』リスト

※画像の転載について

本資料には駒澤大学と立正大学所蔵の『科註妙法蓮華経』、成城大学・中央大学・早稲田大学所蔵の『勢多唐巴詩』の画像を使用しています。資料画像転載の可否につきましては、各大学へお問い合わせください。

「刊記を疑う」　－校合調査に基づく刊年・印行年の推定－

和漢古典籍研究分科会

松下　賢　　（駒澤大学図書館）
高島　みなみ　（成城大学図書館）
八木　彩香　　（中央大学図書館）
堀　はな恵　　（鶴見大学図書館）
小此木　敏明　（立正大学品川図書館）
藤　順一　　（早稲田大学図書館）

研究発表要旨

和漢古典籍資料では「刊・印・修」の区別が重要になるが、資料を 1 点見ただけでそれらを判断することは難しい。本調査では、会員校に複数所蔵のある資料を用い、校合によって刊行年・印行年の推定を試みた。刊記の有無にかかわらず、刊年推定時には書物の綿密な調査と他伝本との校合が重要であり、時には刊記の記載年次を疑うことも必要となる。

〈 研究分科会プロフィール 〉

日本や中国・朝鮮半島などで刊行された古典籍資料について、大学図書館職員として必要な書誌学の基礎知識・書誌作成方法を習得することを目指している。会員所属図書館蔵の和漢古典籍を使って、情報源に対する的確な理解、装訂に関する知識、紙質や字様・分類についての考証、刊印修の分別などとともに、書誌事項の適切な表記の仕方までを演習形式で学ぶ。

〈 研究活動内容 〉

定例の月例会では基礎知識を養うために、堀川貴司著『書誌学入門 :古典籍を見る・知る・読む』(勉誠出版)をテキストに、章節ごとに担当を決めその要約・発表を行なった。
また、会員校図書館が所蔵する古典籍資料を用い、実際に調書作成を実施し適宜講師より助言等いただいた。

夏の集中研究会では外部より講師をお招きし、分科会会員・所属校図書館員で海外（アメリカ）における古典籍資料への取り組み、所蔵資料の利活用についての講演を聴講した。
その他活動として、駒澤大学禅文化歴史博物館において実施された、『正法眼蔵弁註』版木の摺り作業を見学した。

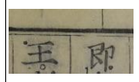
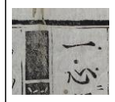
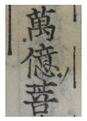
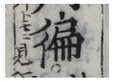
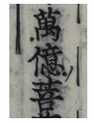
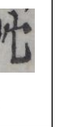
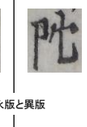
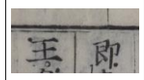
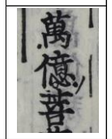
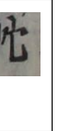
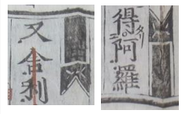
〈　次年度予定　〉

日本や中国・朝鮮半島などで刊行された古典籍資料について、大学図書館職員として必要な書誌学の基礎知識・書誌作成の方法を習得すること目指す。

〈 ホームページ 〉

http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/kotenseki/index.html

『科註妙法蓮華経』対照リスト

請求記号	刊年	西暦	出版者	出版地	辺	界線	行	字	口	魚尾	版心題	大きさ	内匡郭	返点	訓点送仮名付	句読点	巻第1上 14丁表4行目「徧」の画数		巻第1下 24丁 黒口内の模様など		巻第2上 6丁 黒口と魚尾		巻第2下 17丁 魚尾と黒口		巻第3 34丁表 匡郭の上		巻第4 43丁 黒口の割れなど		巻第5 44丁表 界線の割れ		巻第6 17丁表 界線の割れ		巻第7 11丁の黒口と魚尾		巻8 46丁裏「賢」「ノ」	46丁裏「道」	46丁裏「陀」
【立正】A12/159	寛永8年	1631	豊雪斎道伴［中野市右衛門尉］	［京都］	四周双辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	28.2×20.4	19.5×16.1	○	○	○		一画少ない		模様なし		黒口と魚尾接しない		魚尾と黒口接しない		双辺		割れなし				左右に割れ		黒口と魚尾接しない			
【立正】A12/591	慶安4年	1651	中野氏道伴［中野市右衛門尉］	［京都］	四周双辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	27.8×19.5	19.6×16.1	○	○	○	 ＊寛永版からの修か	一画あり		模様なし								割れあり								黒口と魚尾接しない		 ＊46丁: 寛永版と異版	
【立正】 SA12/17/2-10	天和3年	1683	中野氏道伴［中野市右衛門尉］	［京都］	四周双辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	27.7×19.2	－	○	○	○	巻1上欠																						
【駒澤】H353/51	慶安2年	1649	豊興堂［中野小左衛門］	［京都］	四周双辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	28.1×19.8	19.2×16.1	○	○	○		一画少ない		模様なし		黒口と魚尾接しない		魚尾と黒口接しない		双辺		割れなし		割れなし		割れなし		黒口と魚尾接しない			
【駒澤】H353/83	寛文8年	1668	－	－	四周双辺	無界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	単黒魚尾	妙科	31.8×20.0	19.1×15.8	○	○	○		一画あり		模様なし		魚尾に花口なし		魚尾なし		「即」の字体異なる		割れなし		界線なし		界線なし		魚尾に花口なし			
【立正】A12/156	寛文11年	1671	山田屋喜兵衛	京	四周双辺 （上のみ単辺あり） 左右双辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	27.9×19.9	18.9×16.0	○	○	○		一画少ない		模様あり		黒口と魚尾接する		魚尾と黒口接する		双辺の上に線あり		割れなし		割れなし		左に割れ		黒口と魚尾接する			
【立正】A12/157	延寶4年	1676	中村五兵衛	［京都］	四周双辺 （上のみ単辺あり） 左右双辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	27.7×19.5	19.1×16.0	○	○	○																					
【立正】A12/564	貞享3年	1686	河内屋善兵衛	摂陽［大坂］	四周単辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	28.0×19.5	18.5×15.8	○	○	○		一画あり		模様あり（上のみ）		黒口と魚尾接しない		魚尾と黒口接する		単辺		割れなし		割れなし		左に割れ		黒口と魚尾接しない			
【駒澤】H353/87	元禄4年	1691	中村五兵衛	［京都］	四周単辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	28.5×19.5	18.1×15.7	○	○	○			巻1下欠													＊割れなし					
【立正】 183.3/Ka12	元禄4年	1691	灰屋三良右衛門	大坂	四周双辺 （上のみ単辺あり） 左右双辺 四周単辺	有界	8行	17字（小字注文双行）	中黒口	双花口魚尾	妙科	28.6×19.4	19.1×15.8	○	○	○	 ＊寛文11	一画少ない	 ＊寛文11	模様あり	 ＊貞享3	黒口と魚尾接しない	 ＊寛文11	魚尾と黒口接する	 ＊貞享3	単辺	 ＊貞享3	割れなし	 ＊貞享3	左に割れ	 ＊寛文11	左に割れ	 ＊寛文11	黒口と魚尾接する		 ＊貞享3	

＊状態の悪い資料に関しては、黒口や魚尾部分の全体を撮影することは避けた。

■『勢多唐巴詩』について

小本一冊、明和八年八月刊、竹苞楼板。全編、明和八年春から流行し始めたお蔭参りに材を取った銅脈の第二狂詩集、銅脈時に二十歳であった。『勢多唐巴詩』という書名は、瀬田（勢田とも書くが、大群衆が参詣する御蔭参りの書名としては、どうしても「勢多」でなくてはなるまい）の唐橋と称された瀬田橋にちなんだものである。瀬田橋は琵琶湖に架かる東海道筋の端で、都から参宮の人々はこの橋を渡って街道を行き、関と亀山の途中の追分から参宮道に入り、七日ほどを要して往還した。

出典：斎田作楽編「銅脈先生全集　上巻＜狂詩狂文集＞」太平書屋、2008 年

■作者「胡逸滅方海」「銅脈先生」について

畠中観斎（はたなかかんさい）

狂詩作者　[生没]宝暦二年(1752)生、享和元年(1801)6 月 2 日没。

[名号]号、観斎・寛斎・銅脈先生・片屈道人・扁屈道人・太平館主人・胡逸滅方海

[経歴]聖護院宮近習。那波魯堂に学んで漢文学に通じたが、明和六年（1769）「太平楽府」を刊行、以後は狂詩の銅脈先生として知られ、江戸の大田南畝と並び称された。晩年は、柴野栗山・藤原貞幹らと国書の校訂等を行なった。洒落本も執筆。

[著作]狂詩画譜<明和八刊>　狂詩五七言画譜＜明和八刊＞　勢多唐巴詩<明和八>
太平遺響<安永七刊> 太平遺響二編＜寛政一一> 太平楽府<明和六> 等

出典：「国書人名辞典　第四巻」（岩波書店）

■書肆・竹苞楼について

銭屋總四郎

姓氏：佐々木氏　屋号：竹苞楼　所在地：京都寺町通姉小路上ル西側

初代名は春重、享保八年五月十五日生、少時より銭屋儀兵衛に就て業を受け寛延四年五月初めて書林の仲々間に入る、宝暦九年十二月九日通称を惣四郎と改む。爾後代々之を襲用せり、当時の住所は姉小路通り寺町西入北川なり、安永九年十一月二日隠居してさらに通称を勘四郎と改む（中略）

二代名は春行。幼名重五郎・明和元年九月十日生、安永九年十一月父の隠居に際して其の通称を襲う時に年十七。天明八年正月三十日洛中大火の為に類焼を被り損害少なからず。享和元年三月十五日新たに地所屋敷を購入し文化二年十二月十二日其の家に開業す。現在の店即ち是なり。

出典：井上和雄編「慶長以来書賈集覧―書籍商名鑑―」高尾書店、1970 年、44-46 頁

■『勢多唐巴詩』対照リスト（版木の傷など）

和漢古典籍研究分科会会員所属館の所蔵する『勢多唐巴詩』の摺り状態などから、校合により印行時期の推定を行った。

チェックポイント		S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	K1	C1	W1	W2	W3	W4	W5
No.1	序（義鵬子）2丁表 匡郭右下割れ	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○
No.2	本文4丁表 匡郭上部割れ	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
No.3	本文6丁表 「安陀羅校」の＜校＞はらい	短	短	短	長	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短
No.4	序（義鵬子）1丁表 匡郭右割れ	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
No.5	序（梅村和中散人）尾裏 匡郭左部割れ	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
No.6	序（義鵬子）4丁裏 2行目下「補」の送り字＜寸＞の点	△	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	○	—	×	×	×	×
No.7	本文6丁裏 匡郭左側に割れ	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
No.8	本文8丁表 3行目「枚」の＜ノ＞	短	短	短	長	長	長	短	短	短	短	短	長	短	短	短	短	短
No.9	本文8丁裏 界割れ	○	○	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○

傷ができた順番

◇S:成城大学図書館　K:駒澤大学図書館　C:中央大学図書館　W:早稲田大学図書館

◇○：有／該当　△：やや有　×：なし／該当せず　　◇短：短い　長：長い

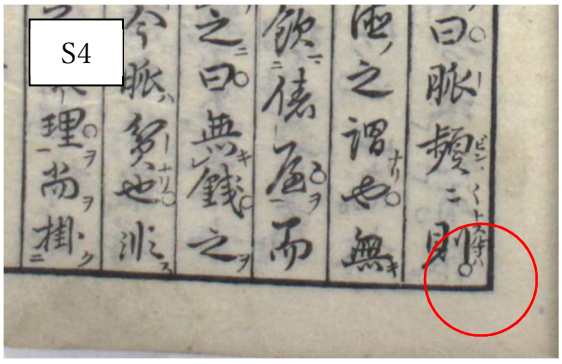
【印行時期の推定】S4→S5→S6・C1→S7・S9・S10・K1・W1・W2→S1・S2・S3・S8・W3・W4・W5

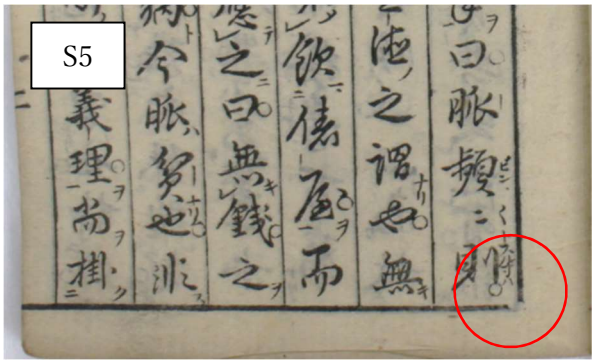
チェックポイント写真

写真は発表資料に用いた下記５冊を掲載する。

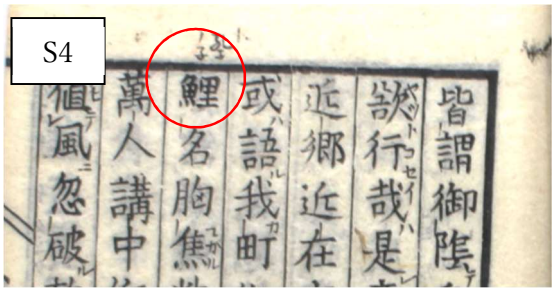
◇S4：出版者名と広告がある資料。版木の傷も一番少ない。
　　全チェックポイントの比較元とした。
◇S5：出版者名と広告がある資料。広告より天明頃に摺られたと考えられる。
◇C1：出版者名と広告がある資料。広告より寛政頃に摺られたと考えられる。
◇S9：無刊記だが梅香園主人の書入れがある資料。
◇S2：S4 と同じ出版者名と広告がある資料。版木の傷等は一番多い。

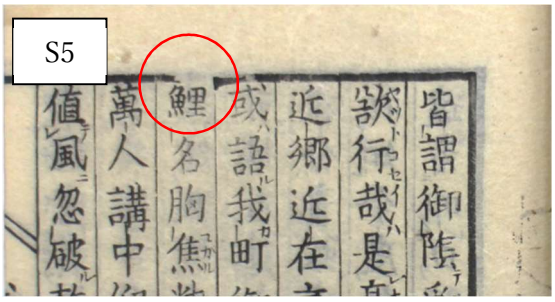
No.1：序（義鵬子）２丁表　匡郭右下割れ

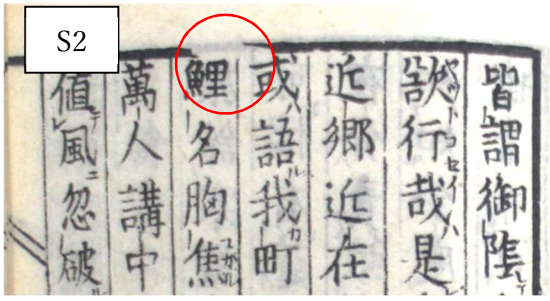




No.2：本文４丁表　匡郭上部割れ

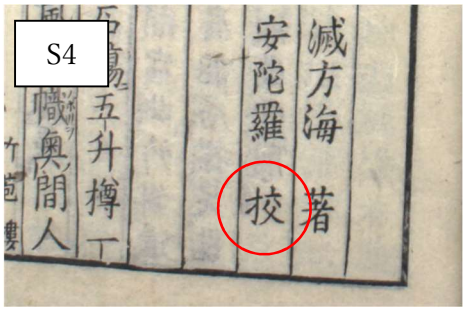


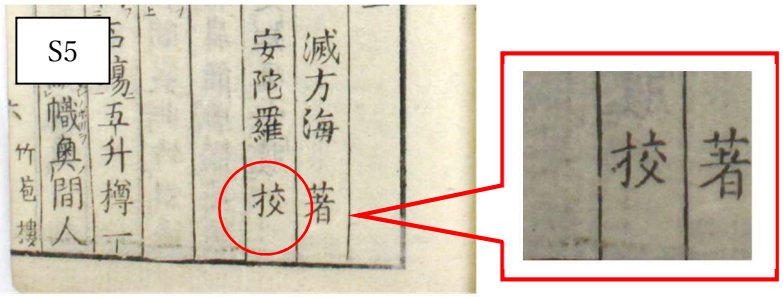




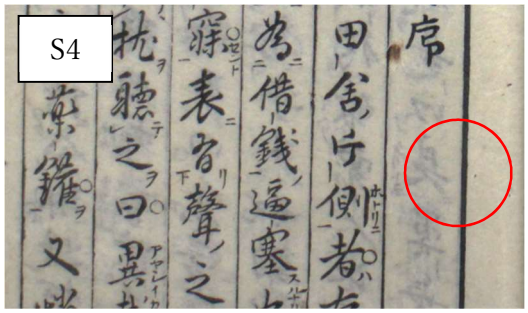
※S2 は S5 より割れが拡大している

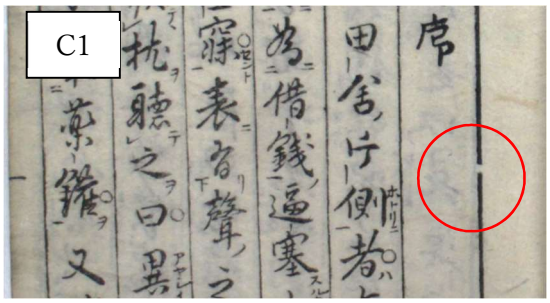
No.3：本文 6 丁表　「安陀羅校」の＜校＞はらい



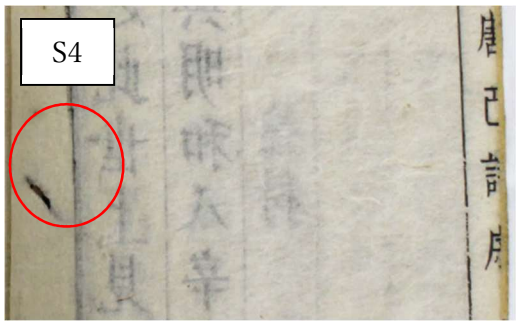


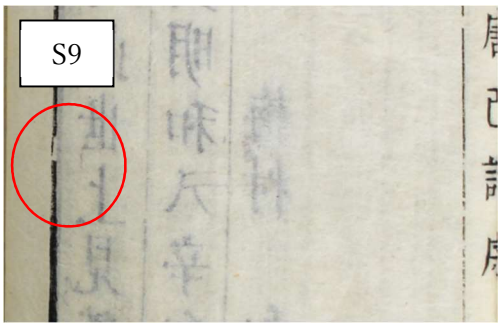
No.4：序（義鵬子）1 丁表　匡郭右割れ



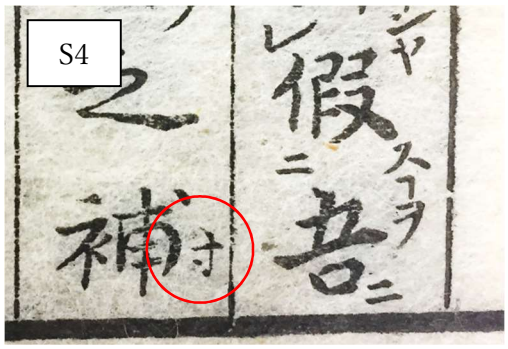


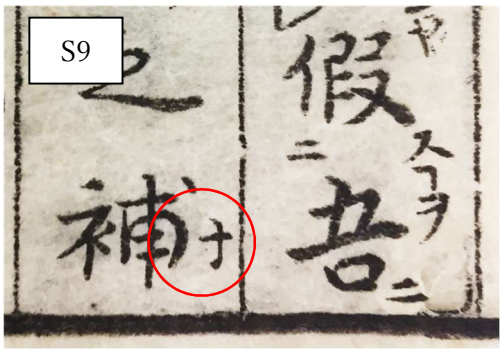
No.5：序（梅村和中散人）尾裏　匡郭左部割れ



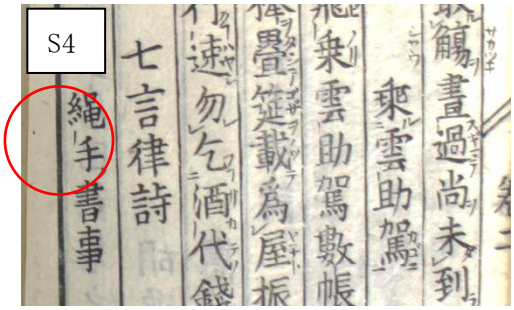


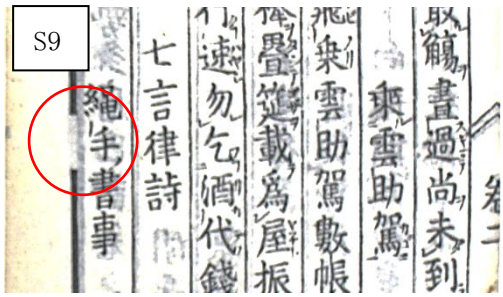
No.6：序（義鵬子）4 丁裏 2 行目下　「補」の送り字＜寸＞の点



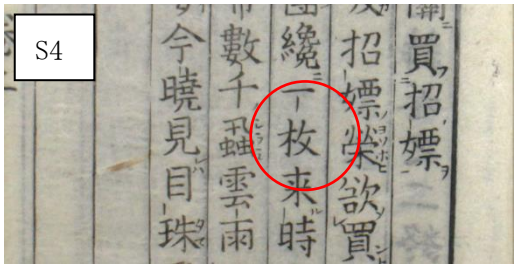


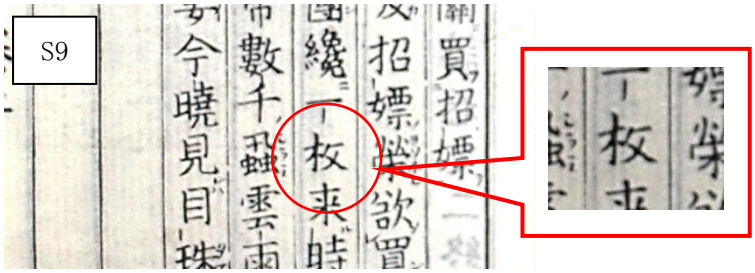
No. 7：本文 6 丁裏　匡郭左側に割れ



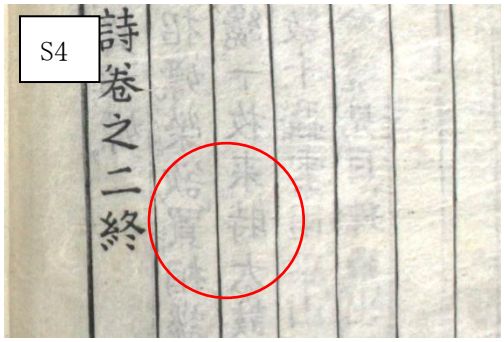


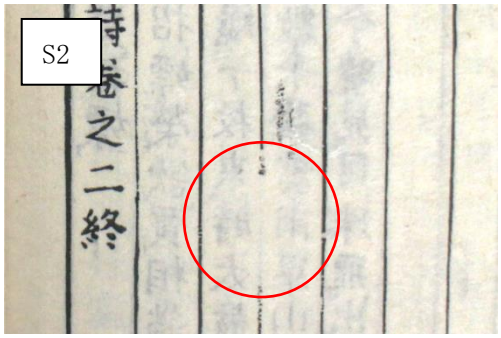
No. 8：本文 8 丁表 3 行目　「枚」の＜ノ＞





No. 9：本文 8 丁裏　界割れ





※画像の転載について
本資料には駒澤大学と立正大学所蔵の『科註妙法蓮華経』、成城大学・中央大学・早稲田大学所蔵の『勢多唐巴詩』の画像を使用しています。資料画像転載の可否につきましては、各大学へお問い合わせください。